



西に江戸川が流れ、東は谷津を隔てて国分の台地に接し、北は松戸市に、そして南は真間の崖地になってこの台地一帯を国府台といっています。この地は、広く下総の国全体からみると、扇の要に位置しています。

国府台の名称は、室町時代に書かれた軍記物の中に、次のような話として載せられています。

日本武尊（やまとたけるのみこと）が、東征の折りに大軍をこの台地で休息させ、武蔵国（東京都）へ向かおうとしましたが、武蔵の台地との間にはたくさんの洲があり、歩行に困難を極めました。その時、一羽の鴻之鳥（こうのとり）が現れ、浅瀬を教えてくださいましたので、尊の率いる大軍は難なく武蔵国の台地に到着することができました。そこで、尊は褒美（ほうび）として、下総の台地を鴻之鳥に与えました。こうしたことから、この台地を「鴻之台」と呼ぶようになった、というのです。

バス停・真間山下に国府神社という神社があります

## 下総国府が置かれた台地

### 国府台

があります。総社は六所神社ともいい、平安時代に全国の国府近辺に設置された神社です。本市で字（あざ）名が使われていたころ、この六所神社を北にして短冊型の地域を「府中」と呼んでいました。府中とは、まさに役所の置かれた地域です。しかし、台地全体から見ると東に寄り過ぎていること、六所神社が平安時代に入ってからつくられたことなどから考えると、それ以前の役所は六所神社の西側、即ち、現在、和洋女子大学を中心とした学校群の中にあつたものと考えられます。

この地は、戦国時代、北条・里見両氏によって二度にわたる合戦が行われ、その際、里見軍によって要塞化されました。要塞の名ごりは、今も、里見公園内に土塁や空堀として残されています。江戸時代には関宿の総寧寺が現在地に移され、明治時代には、大学設置のため用地が買収されました。しかし、学校は建設されず、そこに陸軍の教導団が設置され、以後、軍隊が駐屯し、国府台は軍隊のまちになりました。戦後、その軍隊が使った兵舎が校舎にかわり、現在のような学園地帯になりました。

写真は、「江戸名所図会」に描かれた市川城跡。

次回は「菅野・東菅野」を予定しています。

（社会教育指導員・綿貫喜郎）

が、この神社の祭神は日本武尊で、ご神体はコウノトリの嘴（くちばし）だと伝えられています。これらの話は、中世につくられた地名伝説としての話です。実際には、文字通り、下総国府が置かれた台地ということから付けられたものと解釈してよいでしょう。

それでは、台地のどこに下総の国を治める役所が置かれたのでしょうか。推定の目安として「下総総社跡」